

クサカリツボダイ 天皇海山海域

North Pacific Armorhead, *Pseudopentaceros wheeleri*



管理・関係機関

北太平洋公海漁業資源の保存及び管理に関する条約(未発効)

利用・用途

冷凍ドレスを一夜干し、みそ漬け、粕漬けなどに加工

最近一年間の動き

近年の天皇海山海域におけるクサカリツボダイの全漁獲量は、1,000～8,000トンと変動しつつも、2009年までは低いレベルに留まっていた。2010年の漁獲量は、我が国のみでも17,000トンと前年の10倍以上であったが、2011年の漁獲量は、2,785トンに留まった。また、2012年3月我が国において、クサカリツボダイの資源評価ワークショップが開催され、本種の資源評価には、生物特性や漁業に関する情報のさらなる充実が再確認された。

漁業の特徴

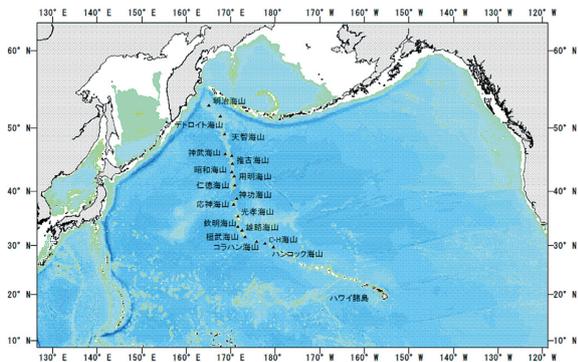
天皇海山海域において、我が国では着底底びき網と底刺し網漁業を行っており、クサカリツボダイだけでなく、キンメダイ、オオメマトウダイなどを主な漁獲対象種としている。底びき網漁船は水深300～500mの海山頂上部で操業を行っている。一方、底刺し網漁船は底びき網漁船と漁場が競合しないように、水深300～1,300mと広い水深帯で操業している。

生物学的特性

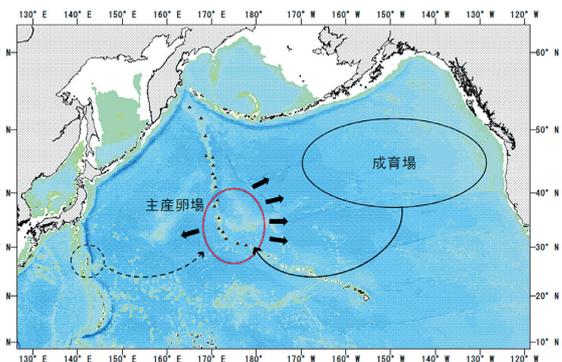
- 寿命：8年
- 成熟開始年齢：3歳
- 産卵期・産卵場：11～2月・天皇海山周辺の水深300～500m水域
- 索餌場：天皇海山の水深300～500m水域（成魚）、北東太平洋の表層域（幼魚）
- 食性：ヒカリボヤやサルバ、ウキビシガイなどの翼足類、ムネエソ類などの魚類、オキアミ類などの甲殻類

漁業資源の動向

1967年に旧ソ連が漁場開発し、我が国では、1969年から天皇海山海域において底びき網漁業を行っている。1976年まで1～3万トンのクサカリツボダイの漁獲があったが、1972年に35,000トンとピークに達した後、急激に減少した。1992～93年と2004年、2010年にはクサカリツボダイの漁獲量が一時的に増加し、卓越年級群が加入したと考えられている。1977年以降、卓越年級群が発生しなかった年の漁獲量は、おおむね1,000トン前後と低位であったが、近年は1,000～8,000トンと変動が大きい。



北西太平洋に点在する海山群（操業が行われる主な海山は、推古海山から南東方向にコラハン海山までとなっている）



クサカリツボダイの産卵場及び成育場（一部、小笠原諸島沖にも成育場が分布している）

資源状態

初期の漁獲量に比べ、近年の漁獲量は低下しており、数年から 10 数年に一度現れる卓越年級がない年は、数千トンレベルの漁獲に留まっていることから、開発当初の状態と比べると、資源量は低いレベルにあると判断される。特に 1993 年から 2003 年までの 10 年間は、卓越加入が現れず、非常に低いレベルにあった。しかし近年の漁獲量を見ると、2004 年と 2010 年に卓越加入が発生しており、資源動向は変動が大きいのが、1990 年代に比べると上昇傾向にあると判断される。

管理方策

クサカリツボダイは、その生物学的特性によって、コホート解析やプロダクションモデルを用いた資源解析を行うことが困難である。そこで、同所的に分布し漁獲されているキンメダイ資源の解析結果から、1997～2006 年の平均漁獲努力量の 20% を削減するとともに、その削減時期（禁漁期）をクサカリツボダイの産卵時期に当たる 11～12 月とした。この管理措置には、クサカリツボダイの産卵量を確保することで卓越年級の発生を促進する効果も期待されている。このほか、公海域の一番南に位置する C-H 海山を暫定的な漁業禁止海域とすることや、漁船数を現状より増加させないことなどの管理措置も併せて行っている。

資源評価まとめ

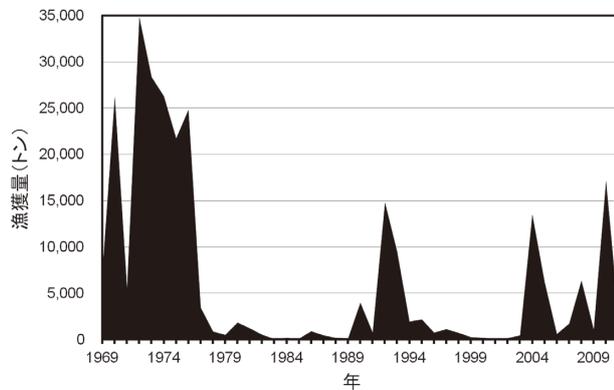
- 資源は低位水準
- 卓越年級群の発生による変動が大きい

資源管理方策まとめ

- 最大漁獲努力量（総操業時間 5,600 時間）の設定、産卵時期である 11、12 月の禁漁
- C-H 海山を暫定的操業禁止海域に設定
- 操業許可漁船数の増大防止

クサカリツボダイ（天皇海山海域）の資源の現況（要約表）

資源水準	低 位
資源動向	卓越年級群の発生による変動が大きい
世界の漁獲量 (2011 年までの 5 年間)	1,259～20,554 トン 平均：6,841 トン
我が国の漁獲量 (最近 5 年間)	1,085～17,153 トン 平均：5,824 トン



我が国の底びき及び底刺し網漁業による天皇海山海域でのクサカリツボダイの漁獲量の時系列